

今月の断酒表彰

◎ K Yさん 南千里支部 断酒二年



令和2年12月1日発行 No.214

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

2020年も残すところあと1か月。今年も一年、断酒会活動ご苦労様でした。

コロナ禍で、研修会や記念大会はおろか、例会すら休会を余儀なくされるなど、断酒会はこれまで経験したこのない厳しい一年でもありました。(表内は敬称略)



「すいただより」来年1月号に皆さんの一言を掲載します。新しい年を迎えるにあたっての抱負、決意、あるいは夢や希望を書いて下さい。散文・俳句・短歌等形式は問いません。別途原稿用紙を配布しますので、各支部支部長まで提出をお願いします。

締切：吹 田支部 12月26日(土)
南千里支部 12月24日(木)

吹田市断酒会のこの一年

月	主な行事		断酒表彰	月	主な行事		断酒表彰
	日	行事名	氏名		日	行事名	氏名
1月	2(木)	三社参り		7月			
2月	9(日)	大阪府断酒会アメリシの集い	I・S A・T	8月			A・D M・T
	16(日) 23(日)	学習交流会 府断地域断酒会一日勉強会					
3月			Y・H O・H	9月			H・K O・T
4月			T・H T・T D・S	10月	15(木)	大和大学アルコール依存症関連研修	Y・S O・H
5月	2(土)～ 17(日)	第35回定時総会(書面表決)	N・T N・K M・N	11月	8(日)	府断家族会家族教室	O・K S・H
					12(木)～ 18(水)	アルコール関連問題啓発週間パ ネル展示(吹田市)	
6月	23(火)	第7回府断定時社員総会		12月	15(日)	府断断酒宣言の日キャンペーン	K・Y

※行事名のうちゴシック体は、吹田市断酒会が主催、共催または運営に参画したものです。

断酒会規範

八 断酒会は酒害相談はもとより、啓発活動を通して社会に貢献する

断酒会員の誠意ある説得で断酒会につながり、現在、「断酒幸福」を自らの手にした人は数え切れない。われわれは断酒できた喜びを断酒会に感謝すると同時に、時間と労力をいささかも惜しむことなく、われわれのために誠意の限りをつくした先輩会員に心から感謝している。そして、そうした人間愛に充ちた行動

が一部の会員に限らず、断酒会員全員の使命であり、断酒会の伝統であることを知った。会員同士の一体感が自らの断酒を可能にし、断酒会を支える最大の力になっていることも知った。また、その一体感が会員だけに限らず、広く酒害者同士にもあるべきものだとして理解し、現在、積極的に酒害相談活動に取り組むようになった。

従って、断酒会は自らの断酒のみならず、酒で苦しんでいる地域の酒害者のために何をすべきかを常に考え、積極的に援助活動をする組織である。援助活動の大半は酒害相談であり、われわれの義務といえるものである。

〈中略〉

断酒会は廃酒思想を持っていない。社会に酒のあることを容認しながら、自らの酒を否定する組織として発足したために社会に受け入れられた。断酒会は会員が姓名を名乗るといふ原則を持つことによって、個々の存在が知られ、地域の多くの酒害者の断酒を可能にした。断酒会活動の最後にあるものは、酒害者をつくらないための啓発活動である。

問題飲酒が始まっているのに、自分を適正飲酒者だと思っている人がいる。家族は悩んでいるのに当人は何の不安もない。そうした家庭に酒害の実体を伝えるのも断酒会の仕事である。

挫折が原因で一時的に酒を乱用している人を、われわれと同じ酒害者にしないため、酒害の正確な情報を与えることも断酒会の役目である。

〈後略〉



みんなの広場

ヤン坊・断坊の断酒談議(8)

ヤン坊「今日はどんな本を？」

断坊「ある病院の待合室で見つけた『抜すいのつづり その79』という小冊子だよ。クマヒラという会社が45万部発行、全国の学校、病院、図書館などに寄贈したものだよ。」

ヤン坊「戦争前後の3年ほど中断を除いて毎年、会社の創立記念日に発行しているとあるね。継続がすごいね。断酒と関係ある内容？」

断坊「そうだよ。その中の栗山桂樹『希望のバトン』は看護師である自分とアルコール依存症患者の交流を描いている、新米看護師の成長物語ともいえるよ」

ヤン坊「かいつまんで言ってみて」

断坊「栗山さんは自衛隊出身で同期とは7歳年長の28歳で看護師になった。2週間の新人研修を終えた初日から50代の男性、アルコール依存症のA氏の担当に。仙骨部に尾てい骨がのぞくほどの褥瘡、そのため下肢は不全麻痺。気難しさから個室で治療、褥瘡からの臭いでベテランの看護師さえ受け持ちたがらない患者であった。こちらから会話をふっても室内は沈黙の支配。が、自衛官時代の図々しさからか、開き直り、A氏に愚痴をこぼすように。返事はなくても仕事のことや恋愛の事、自衛隊時代の上司の嫌がらせの事を沈黙の空間とA氏の褥瘡のポケットに放り込んだ、という。愚痴のないときは母子家庭に育ったことなど生い立ちを喋った。実家が自分の実家と近いことがわかりA氏が自分を語りだし、次第に口数が増えていった。その頃から看護への気持ちも変わる。痛みを伴う洗浄を工夫したり、本人の希望を取り入れる。環境も変化する。入院から半年経って初めてA氏の息子が面会に来た。入院から10か月後、車椅子に乗れるように。約1年ぶりに入浴したA氏の顔は忘れられない、という。家族の力の大きさに気づく。待っていてくれる人がいる希望。看護の微力を思い知った、と。ほどなくA氏は近くの施設へと退院。直後に看護師長から呼び出し。A氏への接し方について何が言われるだろうと覚悟していたら、師長はA氏から『奴はきっといい看護師になる。だから大事に育ててやってくれ』と。さらに師長は『家族に一番近い存在になれていたんじゃないかな』と」

ヤン坊「うれしい言葉だね。ところで『希望のバトン』、どういう意味なのかな？」

断坊「栗山さんは、バトンを息子さんに渡したよ、という感慨じゃないかな」

ヤン坊「新人看護師からアルコール依存症の患者に希望をもって生きて、というメッセージかも知れないし、逆に栗山さんがA氏から看護師として生きる自信を受け取ったのかも。つきなみだけど希望という言葉はいい言葉だね」

断坊「身体的に回復したあと、アルコール依存症の治療と回復に繋がってたらいいね。自助グループにね。栗山さんの結語がまたいいんだよね。『A氏と過ごした約1年間は今も私の看護の原動力となっている』と」

(吹田支部 O.T)